

創作ダンスにメッセージをたくして

海部地区に22ある中学校で唯一ダンス部がある弥富北中学校。創部7年目でありながら、全国大会出場などの実績を残しています。

念願のダンス部を創設 部員集めからスタート

夏休みの教室。独創的な音楽と力強い振付で一糸乱れぬ踊りを見せる弥富北中学校ダンス部。取り組んでいるのは、創作ダンス。定型的な振付や様式にとらわれず、自由な身体表現を楽しみます。掲げたテーマを、身体表現で見る人いかに伝えられるかを目的としており、芸術的な要素を含んでいるのが特徴です。

創部に尽力したのは、顧問の須古井京子先生。創作ダンスとの出会いは、大学時代でした。日本体育大学で学び、卒業後は教員の道へ。最初の3年ほどはダンスから離れたましたが、教員仲間などで再開。「いつかダンス部を受けもきたい」と、強い思いをもち続けていました。

転機となったのは、2012年。名古屋市内のテレビ局が中学生を対象にしたダンス大会を開くというニュースを耳にします。すぐさま、関



顧問 須古井京子先生
日本体育大学在学中に創作ダンスと出会う。弥富北中学校でダンス部を創部以来、県内外の大学・高校と合同でダンスイベントや他校との練習会を企画

心をもった生徒を集めて参加。見事に優勝を飾ります。「やればできる」という気づきを生徒からもらいました」と当時を振り返ります。創部に向けて動き出し、同じ年に念願のダンス部を立ち上げました。

当時は、中学校でダンスが必修化になったタイミング。メディアの報道も手伝って入部希望者が多数集まりました。しかし、多くはヒップホップやハウスなどストリートダンスを希望しており、創作ダンスへの理解がなかなか得られませんでした。部員集めには苦労しました。

「仮入部を経て入部してくる部員は、数名。例年、1年生から3年生まで合わせて10数人で活動していましたが、今年初めて総勢20人を超えました」と須古井先生は笑顔を見せます。

与えられたテーマを熟考し 振付の原案を部員が作成

テーマが決まると選曲し、振付を考案します。「基本的には、生徒も一緒に振りの原案を考えます。テーマや曲からイメージをふくらませる作業も楽しみのひとつですから」。

毎年秋頃から次年度のテーマ、選曲、振りの作品創作に取り掛かります。そして、春に開かれるテ

全国大会で輝く笑顔 弥富北らしさを全面に

7月下旬に開かれた日本中学校ダンス部選手権の日本予選で、上位チームに選出。9月に開かれる全国大会への切符を手に入れました。また、8月には全日本小中学生ダンスコンクールTMの東海大会があり、全国大会出場を狙っています。

ひとつの部がふたつの全国大会出場を目指すのは苦労も多いですが、須古井先生は、「昨年度は全国のステージに立てなかつたので、3年生には、その雪辱を果たしてほしいと思っただのです」とエントリーの理由を打ち明けてくれました。

部員の気合いも十分。暑い中での練習が続きますが、部長の天木星来さんと副部長の伊藤朱音くんを中心に励まし合いながら部を盛り上げています。3年生の天木さんと伊藤さんにとっては、中学生生活最後の大きな大会。「弥富北らしさを、全国に向けて精一杯見せたい」と意気込みます。

創部7年で実力校の仲間入りをした弥富北中学校ダンス部。若きダンサーたちの夏は、まだまだ終わりません。



部長 天木星来さん(3年)
「はじめは部長を務まるのか不安でした。今は部員への気配りができるようになり、成長を感じています」



副部長 伊藤朱音くん(3年)
「創作ダンスに取り組む男子はかなり少ないですが、その分、注目されやすいと思うので、演技に気合いが入ります」



アフリカン柄があしらわれた衣装。大会によっては衣装を含めたビジュアルが審査基準に盛り込まれる。足を大きく開き拳を構えて、鋭い視線で前を見つめる姿からは、アフリカの地で生きる人々のたくましさやイメージできる。前、後ろ、上、下と空間を十分に使ってフォーメーションを組む

ビジュアル審査がない場合は、普段の練習で着用している体操服で大会に臨みます。「他校が衣装を用意する中、うちをあえて体操服で出ることが多いので、『弥富北だ!』とすぐにわかってもらえるようになりました」と須古井先生。時にはバレエダンサーのようなポーズも。体幹をコントロールして、うまくバランスを取る

